

# 獸頭の鳳凰「吉利・富貴」について

——亂世を翔る吉鳥たち——

松 浦 史 子

## 緒言

筆者は二〇〇九年、臺灣の國際學術研討會「新世紀神話研究之反思」に於いて、漢代に鳳凰と共に「五鳳」とされた五方の神鳥「發明・焦明・鸛鵠・幽昌」が、魏晉南北朝という激動の時代を経て、「その出現にも関わらず王朝は滅びた」という歴史的事實を合理的に説明するため「凶鳥」の要素を帯びてゆく過程を論じた研究を發表した。<sup>(1)</sup>この論に對し批判を加えたのが、復旦大學文史研究院の孫英剛氏による「祥瑞抑或羽孽：漢唐間的「五色大鳥」與政治宣傳」(『史林』二〇一二)である。以下、氏による一連の批判の要點を紹介する。

拙稿では、鳳凰に似た凶鳥「發明・焦明・鸛鵠・幽昌」の名前が唐代の主な祥瑞記述には殆ど見えない点などから、隋唐以降、この凶鳥に關する記憶が次第に薄れて行ったものと推測し

た。これに對し孫氏は、唐以降もこの「鳳に似る凶鳥」が政治的に重要な意味を持ち続けていたものと見なし、例えば北魏や竇夏の改元に際して出現した鳳凰の祥瑞を巡り、これが凶兆であった事の證として「五鳳」ではなく「五大鳥」と記す唐以降の史書の記述を主な論據に、拙稿に訂正を加えた。<sup>(2)</sup>唐以降の史料については確かに筆者が見逃していた点であり、孫氏が拙論に對し修正を迫るように、鳳凰と共に五鳳とされた「發明・焦明・鸛鵠・幽昌」を凶鳥とする考えは六朝末で收束するのではなく、唐以降も存続していたとすべきであろう。

孫氏による研究を踏まえ、本論では「漢く唐間に於ける鳳凰の受容と展開」に追加するものとして、現在、朝鮮半島・日本にのみ残る祥瑞情報を手がかりとしつつ、これまで殆ど検討されたことのない「鳳凰に類する吉鳥」について考えてみたい。

## 1 中國の祥瑞情報にみる「吉利・富貴」

## 1-1、唐代の祥瑞總覽―「大瑞」に屬する瑞鳥たち

祥瑞・瑞祥とは、古く戰國時代に成立した天人相關の思想にもとづく。「天」が爲政者の徳治に感應して瑞物を降すという觀念であり、とくに漢代以降、讖緯・陰陽五行などの神秘的思想と統合して大いに流行した。漢初には數えるほどであった祥瑞は漢末迄に一氣に數量を増やし、魏晉南北朝を経て唐代に至るとその數と種類はさらに増加する。漢初には僅か十種ほどであった祥瑞の種類は、唐の玄宗の御代、行政・法制に關する敕撰書として編まれた『大唐六典』（以下『唐六典』）の祥瑞項目では百四十種を數え、「大瑞」(六十一種)、「上瑞」(三十五種)、「中瑞」(三十一種)、「下瑞」(十三種)の四種の品第に大別されている。ところが例えば「大瑞」に數えられる祥瑞の中にも、正體不明なものが少なくない。ただ曉かなのは、それらが漢末から魏晉南北朝という亂世に誕生し、唐代には重要な祥瑞とされた、ということである。いま『唐六典』に於いて最上の祥瑞とされる大瑞のうち、鳥の祥瑞としては鳳・鸞・比翼鳥・同心鳥・永樂鳥があるが、本論では從來知られることの無かった祥瑞として、これらの鳥に續き記される「吉利」「富貴」を採り上げ、その成立と受容について検討する。

## 1-2、劉賡『稽瑞』引孫柔之撰『瑞應圖』にみる吉利・富貴

『唐六典』の祥瑞の項目では、吉利・富貴はその名前のみが記述されるに止まっている。中國に現存する唐以前の文獻にもこれらの祥瑞に關する情報は殆ど残らないが、唯一、その關連記述を確認出来るのが、六朝末・梁の孫柔之撰『瑞應圖』（以下『孫氏瑞應圖』）である。『瑞應圖』とは祥瑞の眞偽を判斷するための圖解書であり、その書名が物語るように本來は各種祥瑞に關する圖像がメインのものだが、既に「圖」の方は逸してしまい「説明文」のみが傳わる。梁代の孫柔之によって編まれた『瑞應圖』には、現在、次の四種がある。

- ① 明・陶宗儀『說郛』
- ② 清・馬國翰『玉函山房輯佚書』
- ③ 清・王仁俊『玉函山房輯佚書續編』
- ④ 民國・葉德輝『觀古堂所著書』

これらに吉利・富貴を見てみると、①②所收の『孫氏瑞應圖』にはその情報は無いが、③清・王仁俊『玉函山房輯佚書續編』（以下『玉函續編』）および④民國・葉德輝『觀古堂所著書』（以下『觀古堂』）所收の孫柔之撰『瑞應圖記』に、『稽瑞』所傳の吉利・富貴に關する佚文が見えている。

『稽瑞』は祥瑞に關する類書であり、現在、百八十種類の祥瑞情報を傳える。二種の祥瑞を對にして讀む「本文」とその祥

瑞に關する「引用文」から爲り、その典據として最も多く引かれるのが『孫氏瑞應圖』である。劉賡の序文に據れば、本書の形式は對句表現を用い、さらにそれが對を爲し、各項目に「諸圖史」による引用文が配されるという。なおこの方法は顔之推の『賦稽聖一章』に似るとされるものの、目下、『稽瑞』に關する唯一の論考を著す水口幹記氏は、その實際は多くの引用文から成る類書であるとし、成立時期を巡っても從來の唐代説に對し宋代の可能性を示している。<sup>(7)</sup>ではこの『稽瑞』所傳の『孫氏瑞應圖』吉利・富貴とはどの様な祥瑞なのだろうか。

まず③清・王仁俊『玉函續編』所收の孫柔之撰『瑞應圖』では、「吉利、鳥形獸頭也」の記述に續けて王氏の按語として「稽瑞曰、吉利鳥形繫封獸驅(稽瑞に曰く、吉利は鳥の形、繫封は獸の身體)」と記している。富貴については「富貴者、鳥形獸頭也」という記述と王氏の按語「稽瑞曰、周匝曷至富貴曷名(稽瑞に曰く、周匝はなぜ出現するのか、富貴はなぜその名なのか)」があるが、「鳥形獸頭(鳥のかたち、獸のあたま)」という『孫氏瑞應圖』佚文の一致にも關わらず、③では富貴は吉利とは別の項目に配され一對とされない。<sup>(8)</sup>一方、④民國・葉德輝『觀古堂』所收の孫柔之撰『瑞應圖記』には同頁内に吉利・富貴が一對のものとして記され、續けて各々「吉利鳥形獸頭也、稽瑞」「富貴者鳥形獸頭也、稽瑞」と述べ兩者共に「鳥形獸頭」であることを伝える(ただし『稽瑞』本文の引用はない)。翻って現行の『稽瑞』に吉利・富貴

獸頭の鳳凰「吉利・富貴」について(松浦)

を見ると、別々の項を設け「吉利鳥形繫封獸驅」「周匝曷至富貴曷名」と記し、各々に「吉利、鳥形獸頭也」「富貴者、鳥形獸頭也」という『孫氏瑞應圖』の引用文があることからすれば、<sup>(10)</sup>③王氏が吉利・富貴を別々の項目とするのは恐らく『稽瑞』の配列を踏まえるものと推察される。この様に『稽瑞』及び③王氏『孫氏瑞應圖』については、吉利・富貴は別々の祥瑞として配列されていた。ところが、現在、日本にのみ残る祥瑞情報を手がかりとするとき、『孫氏瑞應圖』に共に「鳥形獸頭」と傳えられる吉利・富貴は④葉氏の配列同様、本来一對の瑞鳥として考えられていた可能性が高いのである。

## 2 日本渡來の祥瑞志にみる「吉利・富貴」

2-1、『延喜式』「治部省」の祥瑞項目にみる「吉利・富貴」  
『延喜式』は、現在、最も完全な形を留める日本三大格式の一つで、九〇五年、醍醐天皇の命により藤原時平が編纂を着手、その死後は藤原忠平の手を経て九二七に成立、改訂を加えて九六七年に施行された。そのうち治部省には當時の祥瑞情報の集大成とも謂うべき項目があり、全一四五種の祥瑞を「大瑞」五十九種、「上瑞」三十八種、「中瑞」三十三種、「下瑞」十五種に整理する。なお先行の研究ではこの『延喜式』「治部省」の祥瑞の項目の典據は、『唐六典』卷四「禮部省」の祥瑞記述であることが明らかにされている。<sup>(11)</sup>

吉利・富貴の名は『唐六典』と同じく「大瑞」に並んで記されるが、ここで注目したいのは「延喜式」「治部省」の祥瑞にはその典拠となる『唐六典』にはない情報として、各項目の下に「割り注（雙行注）」を伴うことである。本論ではこの吉利・富貴の割り注について次の點に留意したい。まず兩者ともに「鳥形、獸頭」と記されることから、その祥瑞情報は③④の『稽瑞』引『孫氏瑞應圖』と同じであること、さらに吉利・富貴が連続して記録されるその配列から、本書の成立期には「吉利・富貴」は一對の祥瑞として認識されていたと考えられることである。二點目に、この一對の吉利・富貴を巡る「鳥形、獸頭」という祥瑞情報の上限が遅くとも『延喜式』の成立した十世紀初頭まで遡りうる事が挙げられるが、このように本来「一對の祥瑞」として考えられていた吉利・富貴の原貌をさらに明らかにするものとして、續けて、現在、日本にのみ傳わる唐代の『天地瑞祥志』の祥瑞情報を見てみたい。

## 2-2、『天地瑞祥志』第十八「禽」にみる「吉利・富貴」

『天地瑞祥志』は、唐の高宗の麟德三年（六六六）に薩守眞によって編纂された天地に關する災異・祥瑞の記載を集めた専門類書である。その名は古く『日本三大實錄』（八七六）の記載に見えており、下って江戸時代に至るまで持續的に使用された。また平安初期の漢籍總目錄である藤原佐世編『日本國見在書目』でも「天文類」に『天地瑞祥志』の名が確認されるよう

に、日本では主に陰陽家達が、實際の天變地異の吉凶判断を行う際に用いていたことが知られる。現在、日本にのみ現存する佚存書で、三つの抄本（前田尊經閣文庫本、京都大學人文科學研究所本および金澤市玉川圖書館加越能文庫本）があり、そのうち最も完全な形で残るのが前田尊經閣文庫本である。これまでに當本に引用される原典との比較・校勘も行われてきたが、近年、成立地や具體的内容に及ぶ研究が行われ、その關心は日本に留まらず、廣く韓國・中國に波及しつつある<sup>(14)</sup>。

祥瑞に關する説明文のみ残る現行の『孫氏瑞應圖』（前掲①）④とは異なり、前田尊經閣文庫藏『天地瑞祥志』は上半分に「圖像」、下半分がその祥瑞に關する「説明文（その冒頭には典拠となる書籍名がある）」という形式を採る點で、圖像と説明文の揃う瑞應圖としては目下最も完全な敦煌將來『瑞應圖卷』（P.2683）とほぼ同じ體裁である<sup>(15)</sup>。さらに『天地瑞祥志』のいくつかの祥瑞については圖像を伴っており、本論で採り上げる第十八「禽」の項目でも例えば鳳凰に次いで發明、焦明、鸚鵡、幽昌、鸞、吉利、富貴、鸞、商羊（鴉）、鸚鵡の順に記録され、この鳳凰、鸚鵡の全ての項には本来「圖像」が描かれるべき空白が残されている【圖一の上半分および②】。ここで確認したいのは次の二點である。一點目に先述の『延喜式』「治部省」祥瑞記述と異なるのは、卷頭の目次に於いて吉利・富貴の後に「鳥」の字がついており、「吉利鳥」「富貴鳥」と記されたことである。

二点目には『天地瑞祥志』の吉利・富貴は、唐の武則天の政治改革を中心に重要な祥瑞とされた鳳凰「鷲鷲」よりも先に輯録されるように、該書では重要な祥瑞と見なされることである。では『天地瑞祥志』は、唐代の重要な祥瑞「吉利」「富貴」についてどのような情報を伝えるのだろうか。

《名稱》(反切)《圖像》《典據となる書籍名、その説明文(讀點は松浦加筆)》  
吉利(居實反入居至反去) 〔缺〕『瑞應圖』曰、有鳥、獐頭足狀如鳳、

名曰吉利鳥、見則吉利也。

富貴(扶陸反入居謂反去) 〔缺〕

『瑞應圖』曰、有鳥、牛頭足狀如鸛鶴、

名曰富貴、見則爲富貴也【吉利・富貴ともは圖2】。

まず注目したいのは、吉利・富貴の祥瑞情報の典據として『瑞應圖』という書物の名稱が明示されること、王・葉氏『孫氏瑞應圖』および『延喜式』『治部省』の雙行注では「鳥形獸頭」に止まっていた吉利・富貴の特徴を巡り、その「形状」と「效能」についての詳述がある点であろう。

『天地瑞祥志』引『瑞應圖』に據れば、吉利は「有鳥」と記され「鳥」であることが明示される。續けて「獐頭足狀如鳳」の形であり、その效用としてはこの鳥が現れると「吉利」がもたらされるといふ。一方の富貴もまた「有鳥」とされ、續けて

獸頭の鳳凰「吉利・富貴」について(松浦)

「牛頭足狀如鸛鶴」の形であり、この鳥が現れると「富貴」となるという。ちなみに鸛鶴とは、先に筆者が検討した「鳳凰に似る四羽の大鳥」、すなわち本来鳳凰とともに五方の神鳥とされた「發明・焦明・鸛鶴・幽昌」のうちの一羽であり、その該當部分の記述では「狀似鳳凰(狀は鳳凰に似る)」とされる點から【圖1】<sup>(18)</sup>、その形は鳳凰を想起するものであったということになるだろう。とすれば吉利・富貴ともに單なる「鳥」ではなく、その形状は共に「鳳凰」に屬するものとして認識されていた、と言える。また王氏・葉氏引『孫氏瑞應圖』および『延喜式』『治部省』の祥瑞には「獸頭」とのみあるのに對し、『天地瑞祥志』では吉利は「獐頭足狀如鳳」、富貴は「牛頭足狀如鸛鶴」であるといい、具體的な動物の形状に關する情報が付け加えられるのだが、ここで問題となるのが讀點である。例えば讀點の位置を一つ變えるだけで、吉利については「獐頭、足狀如鳳(獐の頭、足の狀は鳳のよう)」「獐頭足、狀如鳳(獐の頭足、その狀は鳳のよう)」、富貴は「牛頭、足狀如鸛鶴(牛の頭、足の狀は鸛鶴のよう)」「牛頭足、狀如鸛鶴(牛の頭足、その狀は鸛鶴のよう)」と、二通りの解釋ができてしまう。では唐代に至って大瑞として重視されたこの瑞鳥の「かたち」はどの様なものであったのだろうか。頭足共に獸形なのか、あるいは頭のみ獸形なのか。それを巡って筆者が注目するのは、いま五世紀初頭の高句麗古墳に描かれる、一群の祥瑞壁畫圖である。

### 3 高句麗古墳にみる「吉利之象・富貴之象」

#### 3-1、徳興里古墳の壁畫について

——前室天井畫にみる牽牛淑女と瑞鳥・瑞獸

徳興里壁畫古墳は一九七六年十二月八日、現在の北朝鮮人民共和國・大安市徳興里（舊江西邑）から發掘された大型の壁畫古墳墓である。中國吉林省集安の一群の古墳群と共に、高句麗王朝時代に成立した古墳の一つとして知られており、永樂十八年（四〇八）の年記を有した墓誌からその墓主である「鎮」の生前の履歴が曉かである。

該墓の重要性は、概ね以下の二點に收斂されるだろう。一點目に、前室北壁の天井中央下部にある墓誌銘および壁畫の畫題から、被葬者の出身地や身分を巡って多くの議論がなされ「漢人説」「高句麗人説」が示されたことである。例えば該墓發見當時の北朝鮮では、この墓主の身分について「遼東太守……幽州刺史鎮」という墓誌の記述を手がかりに、五世紀初頭の高句麗の統治範圍が今の中國河北省一帯（幽州）に及んでいたものと見なし、これを高句麗王朝の勢力圖を覆す大發見として教科書にも書き加えたという<sup>19)</sup>。しかしその墓誌には當時の高句麗には見えない郡縣郷里制度が反映される記述が見える點を中心に反駁が加えられ、現在では「中國から亡命してきた漢人の墓」という説で概ね一致を見ている<sup>20)</sup>。この墓が注目される二つめ

の理由は、前奏を經由して高句麗に傳えられた佛教の初期的受容状況を物語る墓誌・壁畫が残されることにある。しかし該墓墓誌には古の帝王を稱讚する儒家的な語が見えるのみならず、天井畫を中心に神仙道教的畫題が多いことから、佛教・儒教・道教の三教の混交した魏晉（南朝）の知識人の理想とする世界が構想されていたものとするのが最近の見方である<sup>21)</sup>。

該室の構造は、羨道・前室・通路・玄室から成る二室の横穴式石室の形式をとっている。羨道に續く前室は東西に長い長方形で、天井は穹窿平行持ち送り式に作られ、通路に續いて前室よりも大きい玄室が擴がる。墓室内に描かれる繪畫の畫題については、前室東壁および南壁の天井下部に描かれるのが車馬出行圖や狩獵圖などの現實世界であるのに對し、南北西壁に描かれるのは神祕的な天上世界である。特殊なのは前室南壁で、天井の東上方から西下方まで斜めに青色の天の川、その西には織女が描かれ東には牽牛に續けて狩獵圖が描かれることから、西が天上世界・東が現實世界として構成されたものと見なされる【圖3】。つまり東壁の現實世界が南壁の東側く中央に描かれる天の川まで續き、その天の川を挟んで西側から西・北壁にかけては壯大かつ神祕的な天上世界であり、羽の生えた仙人玉女、羽魚・飛馬・神獸・神鳥等が一面に描き込まれている。

ここで留意したいのは、この南壁西方天上世界の織女の傍らに描かれる獸頭鳥身の圖像である。織女の右上に描かれる圖に



は「吉利之象」【圖4】とあり、その下の圖には「富貴之象」とあるのだが【圖4】、目下、出版される該墓に關する各種圖録でも、この鳥を具體的祥瑞に比定する試みは無い。たとえ(22)ば現在、該圖について最新の研究情報掲載する小學館編『世界美術大全集 十 高句麗・百濟・新羅・高麗』(一九九八)の解説文でも、「その形姿は、朱雀状とも、青龍状とも思える幻想的で空想的な、形容しがたいものである」とあり、「その傍らには、「吉利之象」「富貴之象」の墨書があることから瑞獸を表現したと考えられる」との記述が爲されるに止まる。しかし先述の各種祥瑞志に伝えられる吉利・富貴の文字情報からすれば、これらを「瑞獸」とするのは當たらないだろう。

### 3-2、吉利・富貴は「獸頭」か「獸の頭足」か

#### ——文獻と圖像の照合

先述のように『天地瑞祥志』の吉利・富貴の記述を巡っては、その讀點に問題があった。獸形なのは頭と足なのか、あるいは頭のみが獸で足の形は鳳凰なのか。實際の圖像を見てみたい。

いま徳興里壁畫古墳前室南壁に描かれる「吉利之象」「富貴之象」の圖像はともに、左右の羽を高く持ち上げ、三本に分岐した長い尾を持つ姿に描かれ、左右の羽の先は薄綠色、根の部分・體軀と三本の尾は朱色を呈している【圖4】。各圖に委細を見ると、吉利は獸面に作られ、頭上に二本の小さな角、その横に耳が描かれており、「足」について言えば、例えば該墓に

獸頭の鳳凰「吉利・富貴」について(松浦)

描かれる鳥の圖像——陽光【圖5】の足の形と比べると、「鳥」のそれではなく明らかに動物のものに描かれることが判る。富貴についても、頭上に二つの角(あるいは耳)を頂き顔は角張った獸面に描かれ、足の形も丸いこぶの様な形が三つ繋がっており、鳥の足を意識して描かれたものではない。

このような點から吉利は「獸頭」であり、その形は「鳥形」であるという「延喜式」や王・葉氏引『孫氏瑞應圖』に伝えられる情報が正しく、いま最新の圖録に説明されるような「瑞獸」ではないことが明らかになるだろう。ここで「獸頭」についてさらに一步踏み込んで考えてみたい。吉利は頭上に小さな二本の角を頂き獸の足を持つ姿に描かれることを確認したが、これは『天地瑞祥志』引『瑞應圖』に伝えられる情報、すなわち「吉利は獐のろの頭足(吉利、獐頭足)」という内容に合致するものではないだろうか。生物學の見地からすれば「獐」は中國でもとくに北方へ朝鮮半島にかけて棲息する鹿とされ、雄のみ二本の小さな角を持つことでも知られる【圖6】。その角の表象は、例えば「鹿の角」を象ったとされる鎮墓獸のそれに比べると【圖7】、極めて小振りな種が異なる。翻って徳興里古墳壁畫の吉利の足の形を見れば、それが「鳥」ではなく「鹿」に相應しい獸の形であることが判るだろう。一方の富貴については、吉利に比べると『天地瑞祥志』引『瑞應圖』に伝えられる「牛頭」の形状としてはやや不明瞭な點もあるものの、足の形は吉利同

様「鳥」ではなく「獸」のものであることが確認される。このように吉利・富貴ともに獸形なのは「頭」のみでなく「足」を含むものであったと言えよう。續けて吉利・富貴の「鳥形」の要素について『天地瑞祥志』引『瑞應圖』の富貴の説明文に「狀如鸛鶴」とある點に注目したい。六朝〜唐の祥瑞志や史書に「鳳凰に似る」と記される「鸛鶴」の彩色・形状を現在に伝える唯一の作例・敦煌將來「瑞應圖卷」(2683)を見てみると、鸛鶴は、兩翼を高く掲げ二本の長い尾を持ち、羽先は薄翠、尾と身體は朱色に描かれており、徳興里壁畫古墳の富貴の形状・色彩とほぼ一致することが判る【圖1、4】<sup>(26)</sup>。これらを総合すると『天地瑞祥志』の該當箇所の讀點は、吉利については「獐頭足、狀如鳳凰(獐の頭足、その姿かたちは鳳のよう)」、富貴は「牛頭足、狀如鸛鶴(牛の頭足、その姿かたちは鸛鶴のよう)」とするのが適當であらう。

以上、徳興里高句麗墓に見る圖像との對照作業から、前田尊經閣文庫『天地瑞祥志』引『瑞應圖』に傳えられる吉利・富貴の祥瑞情報が圖像的にもほぼ正確であることが證明された。吉利・富貴ともに全體の姿は鳥(鳳)、頭足は獸形に作られるのみでなく、吉利の頭足は紛れもなく「獐」の形であり、富貴は敦煌『瑞應圖』「鳳」の項目冒頭の「鸛鶴」に似る姿に描かれ、『唐六典』や『延喜式』「治部省」の雙行注あるいは『稽瑞』引『孫氏瑞應圖』等はすべて『天地瑞祥志』に引く『瑞應圖』の

祥瑞情報量と正しさには及ばないのである。『天地瑞祥志』引「四羽の凶鳳(發明・焦明・鸛鶴・幽昌)」を巡る情報量・正確さが『續漢書』や敦煌『瑞應圖』のそれを上回るものであったのと同様(前掲注1拙著「圖像編」第二章、吉利・富貴についても、現存する文獻としては『天地瑞祥志』にみる祥瑞情報が最も網羅的かつ正確であると言える。なお紙幅の都合上委細は觸れないが「獐の頭足」「牛の頭足」に描かれる二羽の瑞鳳圖が北魏石棺蓋にも見えることから【圖8】<sup>(25)</sup>、徳興里古墳の他にも吉利・富貴の圖像が存在する可能性を示しておきたい。

#### 4、吉鳥としての鳳凰「吉利・富貴」の成立について―歴史・思想的背景

4-1、「獸面の鳳凰」と「人面の鳳凰」―吉鳳グループの誕生では『天地瑞祥志』引『瑞應圖』に「出現すれば吉利・富貴をもたらす(見則吉利也、見則爲富貴也)」と傳えられる一對の瑞鳳「獸面の吉利・富貴」はどのような文脈の下に誕生したのだろうか。その誕生を巡っては、徳興里古墳の前室西壁天井畫に「千秋之象」「萬歲之象」の傍題のある人面鳥と共に検討する【圖9】。ここで吉利・富貴と千秋・萬歲をセットで考察する理由は、該墓の千秋・萬歲もまた吉利・富貴同様に兩翼を廣げ三本の長い尾を持つ形状であり、手羽の先は薄い綠色、身體と尾は朱色を呈すること、またこの四鳥が共に「吉祥語」を名稱と



する鳳凰であると同時に人面・獸面といった異形に作られること、という具合に共通點が少なくないためである。

人面の鳳凰としての千秋萬歳は、徳興里古墳のほか鄧縣學庄南朝墓の畫像磚にも「千秋」「萬歳」の傍題を持つ人面鳥が確認されるように、主に魏晉以降の畫像墓に見える。では人面の鳳凰・千秋萬歳の記述は、文獻的にはどこまで遡ることができなのか。千秋萬歳の語を辿ってみると、『韓非子』『戰國策』などの先秦の書物、<sup>(26)</sup>そして漢以降魏晉の鏡の銘文・鎮墓文や『樂府』等に「現世の不老長生・死後の永遠の安寧」を願う吉祥語としての千秋萬歳の語が多く見える。一方、「人面の鳥・千秋萬歳」としての記載の嚆矢は晉の葛洪の手になる神仙理論書『抱朴子』に見えるが、この様に漢魏晉にかけて流行した吉祥語「千秋萬歳」が「人面の吉鳳」へと變化した背景として、次にこの二瑞鳳の誕生した時代の思想的展開を概観してみたい。

#### 4-1-1、漢魏晉の神祕思想と「鳳凰」

漢と唐という二大帝國に挟まれた魏晉南北朝は、漢帝國四百年を支えた儒教に代わって佛教や道教が興隆し、北方異族の侵入に伴い短命の王朝が次々と入れ替わった動亂の時代であった。こうした激動期に新たな吉鳳が誕生した要因を知るうえでまず確認しておきたいのは、不老不死や昇仙を旨とする道教が古來の天人相關・災異祥瑞を基底として漢に興隆した讖緯<sup>(29)</sup>（緯書）や陰陽五行などの神祕思想と同じ土壤に發展したこと、この

獸頭の鳳凰「吉利・富貴」について（松浦）

ような神祕思想の擔い手として擧げられるのが、「方士」と呼ばれる術者たちであったことである。彼らは時の文化人でもあり、災異祥瑞説や神仙説の繼承者であると同時に、漢以降、讖緯の神祕思想を學術研究にも持ち込み、後漢から魏晉六朝に掛けては道教の形成にも一役買った人々であった。

かくて漢魏晉の神祕思想と基盤を分かち讖緯説流行の下、爲政者の善政に對する「天」の意志として降される瑞物のうち「羽類の長」として重視されたのが、「鳳凰」である。<sup>(30)</sup>例えば漢・王充『論衡』では鳳凰は麒麟と共に重要な祥瑞として採り上げられるが、それは漢代に於いて鳳凰を巡る祥瑞の上奏が多く、その眞僞が絶えず話題とされたためでもある。<sup>(31)</sup>また陰陽五行説では漢は「火徳」であることから、火禽である鳳凰は漢代に於いて「漢王朝の正統性」を保證する重要な祥瑞とされたのみでなく、<sup>(32)</sup>動亂の魏晉以降もなお漢王朝復興を目的とする政治的シンボルとして崇められた。一方、讖緯・祥瑞説と共に興隆した神仙思想や道教でも、鳳凰は「昇仙」を可能とする仙鳥として重視された。こうした一連の思想的展開を勘案すれば、漢魏晉南北朝の神仙文學や墓葬畫像に於いて「鳳凰」が仙人たちの乗り物として描かれ、<sup>(34)</sup>また不老長生・永遠の安寧（千秋萬歳）を祈念する新たな祥瑞が、「千秋・萬歳」の名を冠する「鳳凰」として誕生し、墓葬畫像の世界に少なからず描かれた筋道も明らかになるだろう。

## 4-1-2、人面の鳳凰「千秋萬歲」の誕生

## ——『山海經』との関わり

では千秋萬歳の「人面」の要素は何に因るのだろうか。この点について、先秦の神話的博物誌『山海經』の漢魏晉南北朝における影響を手がかりに考えてみたい。漢の劉向・劉歆親子の校訂を経て暫く世に顯されたあと次第に廢れていったと傳えられる『山海經』だが（郭璞『山海經注序』）、その奇異な神話世界は、漢末以降、神仙思想を中心に形成された道教の流行を背景に「方士」の手を経て再び蘇生したとされる。

冒頭に確認したように、漢から唐に掛けて祥瑞は一氣にその種と數を増やした。いまその作り手として指摘されるのが「方士」である。<sup>(36)</sup>つまり讖緯や神仙・道教などの神祕思想を背景に「千秋萬歲」の如き異形の祥瑞を生み出した人々と、『山海經』の異形の神話世界を語り傳えてきた人々とは同じ思想的土壌を共有する者なのである。『山海經』が古來「圖像」を伴っていたことについては夙に指摘されるが、<sup>(37)</sup>この奇異な圖像付きの古書『山海經』に初めて系統的注釋を附し、その異形の神話的博物世界の實在を主張したのが晉の博物學者・郭璞であった。讖緯や陰陽五行・神仙・道教など神祕の世界に通じた郭璞に於いて、古來の吉凶觀を保つ『山海經』の「異形の博物」が、緯書說の影響下に「異形の瑞物」として受容される傾向にあったことについては、『山海經』初見の一角の武獸「兕」が後漢

墓葬畫像に多く有翼の瑞獸として描かれる事象を中心に言及したことがあるが、<sup>(38)</sup>漢・唐間の動亂期に見るこの様な異形の祥瑞と『山海經』のとの関わりを踏まえ、ここで再び「人面の鳳凰・千秋萬歲」の祥瑞としての成立の問題に立ち戻ってみたい。

異形の圖像を伴う『山海經』には古來の「人面鳥」が多く描かれており【圖10】<sup>(39)</sup>、その數は人面の「獸」や「魚」を壓倒している。魏晉以降に多く手がけられたとされる『山海經』の系譜に連なる志怪書・博物誌・地理誌にもこれほど多くの人面鳥の記載はなく、例えば『神異經』では人面獸の數が他を凌駕しており人面鳥は殆ど出現しない。一方、この様に『山海經』に人面鳥の記述が多く見られる点について松田稔氏は、人格神のもとでは動物形の山岳神も人間的であるべきという合理化が働き、山岳神にも人間の要素たる「人面」が添加されたこと、<sup>(40)</sup>こうした人面の特徴は殷代の古い思想を留めるものであるという。いま人面鳥・千秋萬歳の初見が、在來の神仙思想を集大成した西晉の神仙理論書『抱朴子』であること、後漢以降、方士を中心に展開した緯書・神仙思想・道教などの神祕思想を基盤として『山海經』の古い神話世界が息を吹き返したことを考えれば、このような思想的潮流の中で、『山海經』の古來の人面鳥の神話的イメージがその「異形の圖像（人面鳥の圖）【圖10】」の影響と相俟って「人面の瑞鳳・千秋萬歲【圖9】」の誕生を促した可能性を示すことが出来るだろう。

## 4-2、獸頭獸足の鳳凰「吉利・富貴」の誕生

——「吉鳥としての鳳凰」vs「凶鳥としての鳳凰」  
4-2-1、『山海經』の筆法を継ぐ「獸頭獸足の吉鳥」

緯書と『山海經』は共に「異形の博物」を満載する圖解書である点など共通項も多いが、一方、兩者の「災異祥瑞（吉凶）」を巡る筆法には差異があることが確認されている。緯書説の影響を受けない古い吉凶觀を持つ『山海經』と、漢以降の神祕思想を反映する予言書・緯書の災異祥瑞を巡る筆法比較については松田稔氏に研究があるため、まずその成果に據り兩者の特徴を「鳥」を巡る吉凶予言の項目に確認し、續けて吉利・富貴の吉凶記述と比較してみたい。<sup>(4)</sup>

## A 【山海經】

① 「南山經」有鳥焉。其狀如雞五采而文。名曰鳳凰。……見則天下安寧。

② 「西山經」有鳥焉。其狀如雄雞而人面。名曰鳧溪。其名自叫也。見則有兵。【圖10】

## B 【緯書】

① 『禮緯斗威儀』君乘土而土、其政太平、鳳凰於苑林。

② 『春秋緯感精符』王者上感皇天、則鸞鳳至。

A 『山海經』の記述は「鳥有り」に始まり、その「形状・名

獸頭の鳳凰「吉利・富貴」について（松浦）

前」等を紹介し、その鳥（鳳凰・鳧溪等の災異祥瑞をもたらす動植物）

が出現した結果、「安寧・戦亂」等が招来される、という因果関係であって、未知の自然現象（異形の動植物）の出現に困って安寧・戦亂といった人事的結果・效能がもたらされる、というプリミティブな予言方式である。一方、Bの緯書ではまず爲政者による善政悪政（安寧・戦亂等）という「人事」が原因として先行し、その結果、災異祥瑞の徴としての異形の動植物（鳳凰等）が出現するという『山海經』とは逆の因果関係であり、人事Ⅱ爲政者の政治を災異祥瑞（吉凶）の原因とする筆法を採っている。

では『天地瑞祥志』引『瑞應圖』の「吉利・富貴」の吉凶を巡る筆法はどうだろうか。

## C 【天地瑞祥志】引『瑞應圖】

「吉利」有鳥。獐頭足、狀如鳳。名曰吉利鳥。見則吉利也。

「富貴」有鳥。牛頭足、狀如鸕鶿。名曰富貴。見則爲富貴也。

（有鳥、狀如……、名曰（形状・名前（自然現象が先）、

見則（吉利・富貴等の吉兆（人事的効能の結果））

先のABの筆法比較を踏まえると、C『天地瑞祥志』引『瑞應圖』「吉利・富貴」の祥瑞記述はB緯書の筆法ではなく、A

『山海經』のプリミティブな吉凶予言の筆法をそのまま繼承するものと言える。またその筆法はA山海經①の鳳凰の祥瑞例とほぼ同じものであることから、この点には吉利・富貴の二鳥を『山海經』の鳳凰の系譜に位置づける意識を見ることが出来るだろう。<sup>(42)</sup>

先述のように徳興里古墳墓はその墓誌から「永樂十八年」の成立であること、該墓壁畫の内容は魏晉の文人達の理想世界が描出されることが確認されている（注二・參照）。このような魏晉文人の理想とした圖像世界に描かれる「異形の瑞鳳」、すなわち「吉利・富貴」「千秋・萬歲」の名稱を傍題に明記する祥瑞圖は、魏晉成立の祥瑞もまた『山海經』世界と不可分のものとして受容されたことを物語る例としても貴重である。<sup>(43)</sup>

#### 4-2-2、吉鳥としての鳳凰「吉利・富貴」の成立背景

##### ——「凶鳳」のとの関わり

では、『山海經』に代表されるように鳳凰は古來「天下に安寧をもたらす吉鳥」であるにも関わらず（前頁A①）、この二鳳が敢えて「吉利・富貴」という「吉祥句」を「名稱」とする理由はどこにあるのだろうか。この点について最後に、鳳凰と共に「五鳳」とされた五方の神鳥「發明・焦明・鸛鵠・幽昌」<sup>(44)</sup>が、動亂の魏晉南北朝を経て「凶鳳」と化し、六朝／唐の祥瑞志（『天地瑞祥志』・敦煌『瑞應圖』等）では鳳の項目の冒頭に配されるほど重要な存在となった「鳳凰」を巡る歴史的變遷を手がかりに考えてみたい【圖1上平分・説明文末尾】<sup>(45)</sup>。先の論考で筆者は、

本来、鳳凰と共に五鳳とされた發明・焦明・鸛鵠・幽昌に「凶鳥」としての要素が加わったのは、五鳳出現に因る改元の爲された三國吳の「五鳳」時代が失政に終わり、吳王朝が滅んだ時期と考えられるものと指摘したが、例えば吉祥句の寶庫である鏡の銘文に於いて「吉利・富貴」の語が多く刻まれるようになるのも、この三國吳の五鳳時代に前後する時期なのである。

「吉利・富貴の語をもつ鏡の銘文」（括弧内の年號、松浦加筆）<sup>(46)</sup>

●「赤鳥七年（二四四、吳孫權）半圓方形帶神獸鏡」

「□鳥七年在□□丙牛昭□□日青清明□。百□漳。服者富貴。長樂未央。子孫□□□□□陽□□□。」

●「五鳳元年（二五四、吳孫亮）半圓帶神獸鏡」

「五鳳元年□□□牛庚申□□□□□□□□大吉利永年。」

●「五鳳三年（二五六）神獸鏡」

「五鳳三年三月□造清竟。服者富貴宜侯王。」

●「寶鼎二年（二六七、吳孫皓）正月半圓方形帶神獸鏡」

「寶鼎二年正月十五日。造作明鏡。百煉精銅。服者富貴。宜公卿。五馬千□□□。」

●「西晉太康四年（二八四、晉司馬炎）半圓方形帶神獸鏡」

「大康四年正月廿八日。造作青鏡。幽凍三商。青龍白虎。東王之公。西王之母。富貴世世吉利大平。」

● 「鳳凰元年（三八六、東晉に相當）九月半圓方形帶神獸鏡」  
 「鳳凰元年九月十二日。吾作明鏡幽三商。大吉利。亘子孫  
 壽萬年。家有五馬千頭羊。」

いま吉祥句「吉利・富貴」が多く刻まれる古鏡の作成年代を見ると、鳳凰にちなんだ改元が多く爲された三國・魏晉という時代であることが判る。それは次々と入れ替わる短命の王朝の正當性を保證するための祥瑞——とりわけ該期の神祕思想を反映した鳳凰を巡る祥瑞の報告が多くなされた時代であり、またそうした鳳凰の上奏にも関わらず王朝は滅びた、という歴史的事件を合理化するため、凶鳥としての鳳凰（發明・焦明・鸛鶻・幽昌）が誕生した時代でもあった。言い換えるならば、「鳳凰を巡る災異」に脅かされた時代なのである。<sup>(48)</sup>

この様な時代的背景を踏まえると、敢えて「吉祥句」を名稱とすることで「吉兆」としての役割を初めから定めた「吉利・富貴」という吉鳳の誕生した文脈が見えてくるのではないか。

『山海經』所載の「人面鳥」の名稱はその「鳴き聲（動態）」に由るものが殆どだが（A『山海經』②：名曰鳧溪、其名曰叫也。ほか、注三十九参照、吉利・富貴の名稱はむしろその「吉兆としての效能（C『天地瑞祥志』引『瑞應圖』①：名曰吉利、見則吉利也。／②：名曰富貴、見則富貴也。）」の方に由来する。またその筆法から『瑞應圖』の吉利・富貴には『山海經』の鳳凰に連なる意識が見えるものの、

獸頭の鳳凰「吉利・富貴」について（松浦）

『山海經』の鳳凰の名稱については「吉兆としての效能（安寧・太平）」とは無関係である。かくて『山海經』の人面鳥のように「動態」を名稱とする譯ではなく、同じ『山海經』の系譜にある瑞鳳であってもその鳳凰の本来の記述とは異なり、「吉兆としての效能（吉利・富貴）」の方を敢えて「名稱」に冠し強調する吉鳳「吉利・富貴」が誕生し、唐に至って重要な祥瑞として受容された背景には、魏晉から隋唐に掛けて「天下を滅亡に導く凶鳳」と懼れられた發明・焦明・鸛鶻・幽昌の存在がアンチテーゼとして大きく関わっていたものと考えたい。獸頭獸足の鳳凰「吉利・富貴」は、魏晉南北朝という動亂の世に共有された「災異を招く鳳凰——發明・焦明・鸛鶻・幽昌」への畏怖を基盤としつつ、天下に吉事をもたらす吉鳥としての眞面目を取り戻すべく新たに成立・展開をみた、「亂世の吉鳳」と言えるだろう。

### 結語

魏晉南北朝の畫像墓について層の厚い研究のある鄭岩氏は、甘肅一帯の魏晉十六國墓と高句麗の徳興里古墳墓に見る祥瑞圖が同様の小幅の形状を採ることから、兩者には粉本となる共通の「瑞應圖」が用いられていたであろう可能性を示している。<sup>(49)</sup>

この點に加え、前田尊經閣文庫『天地瑞祥志』に見る「鳳凰に似る凶鳥（發明・焦明・鸛鶻・幽昌）」が敦煌『瑞應圖』（<sup>(50)</sup>

の「鳳」の冒頭に描かれる名稱不明の四羽の鳳凰に該當するものであったことを踏まえれば（松浦二〇一〇【圖一】）、いま北朝鮮の徳興里古墳にのみ「傍題」を伴う圖像情報が残され、『天地瑞祥志』に最も詳細な文字情報の伝えられる「吉利・富貴」についても、敦煌『瑞應圖』の四凶鳳に續く缺損部分に【圖一（半分・左端）】、『天地瑞祥志』引『瑞應圖』の吉利・富貴に見るのと同様の「説明文【圖二】」と共に、徳興里古墳に見るのと同様の「獸頭獸足の鳳【圖4】」の「圖像」が描かれていた可能性は高い。<sup>30)</sup> さらに敦煌『瑞應圖』の凶鳳の圖像が『天地瑞祥志』の四凶鳳の空白部分にも描かれる予定であったように【圖一（矢印）】、『天地瑞祥志』の吉利・富貴の空白部分に描かれるはずの吉鳳圖は【圖二】、徳興里古墳に見る「獸頭獸足の鳳」に似る姿に描かれていたものと考えられる【圖4】。六朝から隋唐に掛けて、内亂を招くものとして焚書の対象となった緯書も多く、中國に現存する祥瑞情報に限りのあるなか、いま中國の周邊部にのみ保存される圖像・文獻の祥瑞情報をつなぎ合わせることで、六朝〜唐に重視された凶鳳「發明・焦明・鸚鵡・幽昌」や吉鳳「吉利・富貴」の様に本來の姿が明らかになる祥瑞も少なくない。

【附記】、本稿は、日本學術振興會科學研究費【基盤研究C】平成二十六年〜二十八年「漢魏晉南北朝隋唐における『山海經』の

受容」神話と文學・社會」、課題番號二六三七〇四一五」の研究助成を受けた成果である。

### 【注】

(1) 拙稿「關於祥瑞志中可見的似鳳四凶鳥（發明・焦明・鸚鵡・幽昌）之來歷」以日本前田尊經閣文庫本『天地瑞祥志』引『樂斗圖』爲端緒」（『新世紀神話研究之反思國際研討會論文集』二〇一〇）、日文版は加筆補正し拙著『漢魏六朝における『山海經』の受容とその展開―神話の時空と文學・圖像』（汲古書院二〇一一）に所收。

(2) 例えば唐・李延壽『北史』では北魏末に劉靈が鳳凰の瑞によって擧兵し王を稱そうとしたことについて、「馴養大鳥、稱爲己瑞、妄說圖讖、言劉氏當王」と記し、五代・劉昫『舊唐書』でも隋末の混亂期に竇建徳が五大鳥の出現を以て五鳳と改元し「夏」を建國したことについて、「有五大鳥降于樂壽……因改年爲五鳳。」と記す。

(3) 前漢・董仲舒『春秋繁露』「王道・五行順逆」には十一種ほどであった祥瑞は、後漢初・班固『白虎通』では景星を初め二十七種が掲載される。さらに後漢末迄にその數は急増し（晉・范曄『後漢書』「章帝紀」「在位十三年、群國所上符瑞、合於圖書數百千所」、六朝中期の『宋書』「符瑞志」に至っては二百品目を數える。

(4) 祥瑞が「大瑞」「上瑞」「中瑞」「下瑞」に分けられた嚆矢



は唐禮部式であり、先行する六朝時代の纏まった祥瑞記述〔宋書〕「祥瑞志」等〕にはその品第分けは爲されていない。こうした「祥瑞のランク化」は、主に隋唐以降、國家安定化のため官僚機構内で祥瑞を管理する必要のもとに爲されたとされる（大隈清陽「儀制令における禮と法―律令法系の構造的性質をめぐって」一九九三、水口幹記「類書『稽瑞』と祥瑞品目」同氏「古代日本と中國文化 受容と選擇」塙書房二〇一四、第二章、等参照）。

(5) 唐・張九齡撰『唐六典』「尚書禮部」では「凡祥瑞應見、皆辨其物。名若大瑞・上瑞・中瑞・下瑞、皆有等差、若大瑞隨即表奏、文武百僚詣闕奉賀。其他並年終員外郎具表以聞、有司告廟百僚詣闕奉賀。」とあり、上々下瑞は年末に纏めて奏上するのに對し、「大瑞」のみ即時上奏すべき重要な祥瑞とされた事が判る。

(6) 六朝には、南齊・庾溫撰『瑞應圖』〔南齊書〕「祥瑞志」、梁・孫柔之『瑞應圖』〔隋書〕「經籍志」、注には「瑞應圖記」、熊理『瑞應圖讀』〔新唐書〕「經籍志」や梁・顧野王『符瑞圖』〔南史〕「列傳第五十九」など多くの『瑞應圖』が編纂されているが、中でも孫氏の『瑞應圖』は唐禮部式の祥瑞記述と共通する項目が多いこと等から、唐代で最も重視された『瑞應圖』と評される（注五、水口二〇一四、四十四頁参照）。

(7) 前掲注四水口（二〇一四）、第二章「類書『稽瑞』と祥瑞

獸頭の鳳凰「吉利・富貴」について（松浦）

品目―唐禮部式と延喜治部省式祥瑞條に關連して」、第三章「類書『稽瑞』の成立年代について」参照。

(8) 清・王仁俊『玉函山房輯佚書續編』（上海古籍出版社一九八九）、「子編五行類」所收「孫氏瑞應圖」「吉利」（二六二頁）、「富貴」（二六三頁）。

(9) 民國・葉德輝『觀古堂所著書』（光緒辛丑夏六月刊本）、第一集所收『孫氏瑞應圖記』「吉利・富貴」（二二頁）。

(10) 清・鮑廷爵輯『後知不足齋叢書』〔百部叢書集成〕七十一、藝文印書館、第二函所收『稽瑞』。

(11) 重松明久『古代國家と宗教文化』第九「古代における祥瑞思想の展開と改元」、三「祥瑞の意味するものと改元」（吉川弘文館一九八六）。律令の祥瑞規定が『大唐六典』所見のもの模倣であったことは、『法曹類林』卷二百二十六、公務三四「蓋是倣大唐六典之體也」に確認される。

(12) 虎尾俊哉『譯注日本史料 延喜式（中）』（集英社二〇〇七）参照。

(13) 『天地瑞祥志』を巡る研究史については、前掲注一拙著『圖像編』二章、注三参照。

(14) 權惠永『「天地瑞祥志」編纂者に對する新しい視覚―日本に傳來した新羅天文地理書の一例』（『白山學報』五二・一九九九）、趙益・金程宇『「天地瑞祥志」若干重要問題的再檢討』（『南京大學學報（哲學人文科學・社會科學版）』二〇一二）、余欣『博望鳴沙』（上海古籍出版社二〇一二）、孫英

- 剛『神文時代』（上海古籍出版社二〇一四）等。
- (15) 敦煌將來『瑞應圖卷』<sup>(2683)</sup>は現存の『瑞應圖』のうち圖像と説明文を兼備する最も早く完全な作例だが、首尾は缺一「龜・龍・鳳」の三種のみが残り、末尾「鳳凰」の一部は缺損する。上半分に「祥瑞圖」下半分にその「説明文」が記され、その文辭から孫氏「瑞應圖」との關わりが説かれるほか（陳槃『古識緯書錄解題附錄之一』中央研究員歴史語言研究所集刊十七本、一九四八）、『天地瑞祥志』との形式上の類似点も指摘される（東野治之「豊旗雲と瑞雲」『遣唐使と正倉院』岩波書店一九九二）。
- (16) 孫英剛（緒言、前掲注十四）に據れば、武周革命を遂行した武則天が「鸞」を重視したのは、それが「周代に岐山に出現した瑞鳥である（『國語』「周語」「鸞、周之興也、鳴于岐山」という來歴に有るといふ。【圖？・左頁】参照。
- (17) 吉利・富貴の情報を傳える『天地瑞祥志』引『瑞應圖』がいずれの『瑞應圖』（前掲注六）に該當するのかは判然としない。
- (18) 唐・薩守眞『天地瑞祥志』（讀點は松浦加筆）「禽」引「鸞」。「樂斗圖曰、西方鳥也。狀似鳳皇。鳩喙、專形。身義、戴信、嬰、仁、膺智。至則早疫之滅、爲早備也……」
- (19) 社會科學院歷史研究所『朝鮮全史』三（科學・百科事典出版社、平壤一九七九）第四章「幽州地域への進出、州・郡・縣の設置」（武田幸男「徳興里壁畫古墳被葬者の出自と經歷」『朝鮮學報』一三〇、一九八九）参照。
- (20) 墓主の漢人説については、武田幸男「徳興里壁畫古墳被葬者の出自と經歷」（『朝鮮學報』一三〇、一九八九）、田中俊明「孫永鍾「高句麗壁畫古墳の墨書銘と被葬者」について」（『高句麗古墳壁畫』高句麗研究四、學研文化社、一九七九）など参照。
- (21) 門田誠一「高句麗壁畫古墳と東アジア」第二章三節、終章（思文閣出版二〇一一）参照。
- (22) 例えば、最も網羅の内容を持つ海外の圖錄『高句麗古墳壁畫』（朝鮮學報社一九八五）の説明文でも「富貴神」とのみあり、具體的な説明はない。
- (23) 敦煌『瑞應圖』では四鳳（恐らく五鳳）共に同じ形狀・彩色であり、「似鳳」とされるようにその區別は難しい。
- (24) 敦煌『瑞應圖』の四鳳は身體に續く短い尾とその上に広がる二本の長い尾であるのに對し、徳興里古墳の吉利・富貴は長い尾は三本に描かれるが構造上は同じ。
- (25) 黃明蘭編著『洛陽北魏世俗石刻線畫集』（人民美術出版社一九八七）、圖版番號七四「解放前洛陽東北鄉解坡村南尖家內出土・飛仙石棺蓋畫像」
- (26) 『韓非子』「顯學」「今巫祝之祝人曰：使若千秋萬歲。千秋萬歲之聲聒耳、而一日之壽無徵於人」、『戰國策』「楚策」「於是楚王遊于夢……仰天而笑曰：樂矣、今日之游也。寡人萬歲千秋之後、誰與樂此矣。」

- (27) 【古鏡銘文】「漢千秋萬歲鐵鑑銘」「千秋萬歲、富貴不斷」  
 【清『通俗編』「祝誦」「富貴不斷」引「博古圖」】、【鎮墓文】  
 「建初五年閏十月畫虜奴鎮墓文」「生死異路、千秋萬歲、不  
 得相注忤、便利生人」、【樂府】「晉杯繁舞歌詩」「晉世寧、  
 四海平、普天安樂永大寧。…人命長、當結友、千秋萬歲皆  
 老壽」等。
- (28) 唐・魏徵等『隋書』「王昭傳」「時有人於黃鳳泉浴、得一  
 白石…其大玉有日月星辰、…又有却非及一鳥、其鳥皆  
 人面、則『抱朴子』所謂千秋萬歲也。」、晉・葛洪『抱朴子』  
 「內篇」「對俗編」「千歲之鳥、萬歲之禽、皆人面鳥身、壽亦  
 如其名。」
- (29) 安居香山『緯書と中國の神秘思想』（平河出版社一九九四）  
 第二章「道教の形成と識緯思想」参照。
- (30) 漢・班固『白虎通』「封禪編」「鳳凰者、禽之長也。上有  
 明王・太平乃來、居廣都之野」、晉・郭璞『山海經圖讚』  
 「鳳皇靈鳥、實冠羽羣、八象其體、五德其文、附翼來儀、應  
 我聖君。」
- (31) 漢・王充『論衡』「講瑞編」「或問曰、「講瑞謂鳳皇麒麟難  
 知、世瑞不能別。今孝章之所致鳳皇麒麟、不可得知乎？」…」
- (32) 『春秋元命包』「火禽爲鳳皇、銜書遊文王之都、故武王受  
 鳳書之至。」、「『鶡冠子』「鳳鶡火禽陽之精也、德能致之、其  
 精畢至。」
- (33) 晉・干寶『搜神記』「太安中…其秋、張昌賊起、先略江  
 獸頭の鳳凰「吉利・富貴」について（松浦）
- 夏、誑曜百姓。以漢祚復興、有鳳凰之瑞、聖人當世、從軍  
 者皆絳抹頭、以彰火德之祥。百姓波盪、從亂如歸、騎兄弟  
 並爲將軍都尉、未幾而敗。」
- (34) 晉・葛洪『抱朴子』「內編」「對俗篇」「夫得道者、上能竦  
 身于雲霄、下能潛形于川海、是以籙史偕翔鳳以凌虛、琴高  
 乘朱鯉于深淵、斯其驗也。」「後漢書」「逸民列傳」「蓋聞黃  
 老之言、乘虛入冥、藏身遠遯。亦有理國養人、施於爲政…  
 足下審能騎龍弄鳳、翔嬭雲間者、亦非狐兔燕雀所敢謀也。』  
 ここで鳳凰に駕す代表的神仙とされる籙史や王子喬は、魏  
 晉以降の墓葬畫像の世界においても重要な畫題となった。
- (35) 伊藤清司『中國の神話傳説』「はじめに」（東方書店一九  
 九六）参照。
- (36) 一般に、緯書の形成者は「學者・方士・思想家」とされ  
 る（安井居山『緯書の基礎的研究』四「緯書思想研究上の  
 諸問題」2「緯書思想の形成者とその傳承」、六十八頁参照）。
- (37) 宋・朱熹（王應麟『玉會補注』引）、明・楊昇庵（楊昇  
 庵全集）卷二「山海經後序」ほか、清には畢沅、阮元に  
 『山海經』古圖への言及があり、今人では松田稔、『山海經』  
 海經における繪畫的要素（『學苑』一月號、一九八九）等。
- (38) 前掲注一、拙著「圖像編」第一章。異形の祥瑞の眞偽を  
 正しく判断するための根據とされたのが圖解書（圖書）で  
 ある。その存在を示す早い例に武氏祠の後漢畫像石に見る  
 祥瑞圖があるが、そこに刻まれる祥瑞の名稱と説明文の粉

## 中國詩文論叢 第三十三集

本は緯書の圖解類であることが推測される（佐原康夫「漢代祠堂畫像考」一九九二）。この點を踏まえ筆者（松浦）が注目したのは、武氏祠後漢祥瑞圖に『山海經』の鳥獸圖がその經文とともに描かれる點である。これは古來の吉凶を有する『山海經』の異獸達が、漢以降の讖緯說興隆の下に「異形の瑞物」として受容されたことを物語る好例であり、『山海經』に初出の一角の武獸「兕」が後漢畫像墓には多く有翼の祥瑞として描かれるのもその一例とした。またこの様な『山海經』の博物の祥瑞轉化現象は晉の郭璞『山海經圖讚』に認められるが（兕・九尾狐・乘量・白虎・白狼・水馬・騶吾など）、その主因の一つとして筆者は、『山海經』が原始的予言書であると同時に「異形の博物圖誌」という性質を兼ねる點に於いて、同じく「異形の祥瑞の圖解書」を持つ予言書・緯書と本質的に通じるためであることを指摘した（掲載注一拙著『圖像編』第一章）。

(39) 『山海經』「南山經」「南次三經之首、……禱過之山。……有鳥焉。其狀如鵠、而白首三足、人面。其名曰瞿如。其鳴自號也。」「又東四百里、曰令丘之山。……有鳥焉。其狀如梟、人面四目而有耳。其名曰顛。其鳴自號也。見則天下大旱。」、「西山經」「又西二百里、曰鹿臺之山。……有鳥焉。其狀如雄鷄而人面。名曰鳧僂。其名自叫也。見則有兵。」「西南三百六十里、曰崦嵫之山。……有鳥焉。其狀如鴉而人面、雌身犬尾。其名自號也。見則其邑大旱。」、「北山經」

「又北三百二十里、曰灌題之山。……有鳥焉。其狀如雌雉而人面、見人則躍。名曰竦斯、其鳴自呼也。」など。

(40) 松田稔「異形山岳神小考」『山海經』を中心として「漢文學會會報」二二、一九七六、同氏「古代中國における神格の形状」『山海經』を中心として（『日本文學論究』四二、一九八三）等。

(41) 松田稔「『山海經』における災異」（『日本文學論究』三〇、一九七二）、同氏「『山海經』に於ける祥瑞」（『漢文學會會報』二七、一九八一）参照。なお『山海經』の鳥について本稿本文（松浦一八六頁）では吉鳥凶鳥の兩例を挙げたが、『山海經』所載の鳥は凶鳥が殆どであり、吉鳥は鳳凰や鸞などごく僅かである。

(42) 緯書的な『山海經』受容は例えば郭璞に於いて顯著だが（前掲注三三八）、一方、『天地瑞祥志』引『瑞應圖』吉利・富貴のように『山海經』本來の吉凶の筆法を踏まえる新たな祥瑞例、あるいは古來の吉凶觀を保存する『山海經』の異形の博物をそのまま引用する例も六朝・唐の祥瑞圖志には少なくない。この様な現象は魏晉の博物・異物誌にも多く見えるものであり、この點、該期に於ける『山海經』受容の特徴の一つとして注目したい。

(43) 徳興里古墳壁畫には他に例のない祥瑞として、吉利・富貴の傍に『山海經』に初出の人面獸「猩猩」の圖像が描き込まれる【圖3】。これも魏晉の祥瑞世界と『山海經』が不

可分のものとして展開したことを示す例であろう。

- (44) 『説文解字今釋』「鷦」「鷦鷯也。五方皆神鳥也。東方發明、南方焦明、西方鷦鷯、北方曰幽昌、中央曰鳳皇。」

- (45) 唐『天地瑞祥志』引『樂斗圖』の「發明・焦明・鷦鷯・幽昌」の説明文末尾には、出現すれば「戰爭（發明）」、「水害（焦明）」、「旱（鷦鷯）」、「旱（幽昌）」が生じるとの凶事の記載があり、同様の凶事は『後漢書』「五行志」注、敦煌『瑞應圖』に引く發明・焦明・鷦鷯・幽昌の記載にも見えている。

- (46) 前掲注一、拙著「圖像編」第二章。この四凶鳥の情報傳える最古の史料が晉・司馬彪『續漢書』「五行志」であるが、その編纂時期は丁度、「鳳凰の出現による五鳳改元にも関わらず、王朝は滅びた」という三國吳の五鳳時代であり、司馬彪の青年期にあたる。

- (47) 梅原末治『漢三國六朝紀年鏡圖說』（桑名文屋堂一九三二）、駒井和愛『中國古鏡の研究』第四節「銘文に見える吉祥の語句」（岩波書店一九五三）等参照。

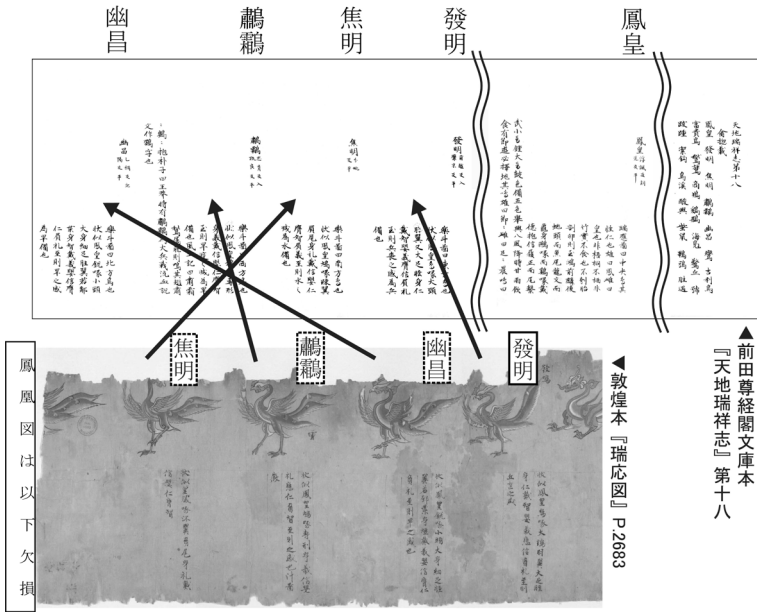
- (48) 前掲注一、拙著「圖像編」第二章。

- (49) 鄭岩『魏晉南北朝壁畫墓研究』（文物出版社二〇〇二）下編「分析與探討」五「從魏晉壁畫墓看涼州與中原的文化關係」一七五～六頁参照。なお鄭岩氏の見解は、山東・後漢武氏祠畫像石祥瑞圖に元となる『瑞圖』の存在があったとする巫鴻氏の説（同氏「The Wu Liang Shrine The

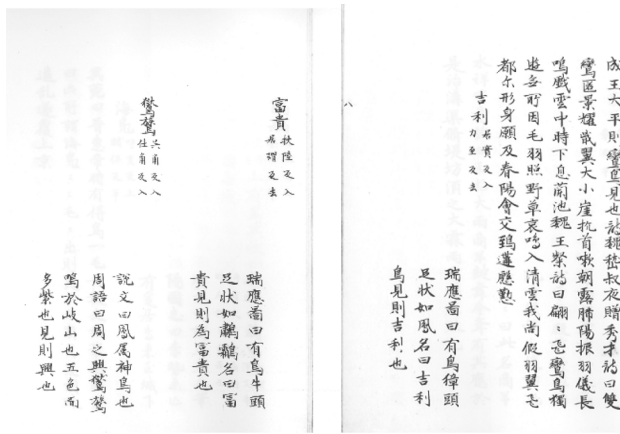
獸頭の鳳凰「吉利・富貴」について（松浦）

Ideology of Early Chinese Pictorial Art」Stanford University Press 1989）、及び漢晉の祥瑞圖と不可分の敦煌出土『瑞應圖』が甘肅河西一帯の墓葬壁畫に影響を與えたことを指摘する段文傑氏の説（同氏『段文傑敦煌石窟藝術論文集』一九九四、「道教題材は如何進入佛教石窟的」に基づく）。

- (50) 敦煌『瑞應圖』と『天地瑞祥志』は「圖像・説明文」の揃った現存の祥瑞志としては最も情報量が多く、共通項の多さも注目される（前掲注十五）。また『天地瑞祥志』第十八「禽」の冒頭の鳳凰から鷺鷥迄は本論で検討した吉利・富貴を含め、全て鳳類であるが【圖一】、このように同種の祥瑞を纏める形式も敦煌『瑞應圖』と同じである。これらの類似点から、『天地瑞祥志』「禽」冒頭の鳳グループと同じく、敦煌『瑞應圖』鳳凰の缺損部分にも發明・焦明・鷦鷯・幽昌に續き、獸頭獸足の鳳「吉利・富貴」の圖が配されたものと推測する。



【圖 1】前田尊經閣文庫『天地瑞祥志』第十八「禽」引『樂斗圖』「發明・焦明・鸛鷓・幽昌」と敦煌本『瑞應圖』の鳳凰の比較（『天地瑞祥志』右端が目次：鳳凰、發明、焦明、鸛鷓、幽昌、鸞、吉利鳥、富貴鳥、鸞鷓、商鷓、鷓鷓（以下略））



【圖 2】『天地瑞祥志』第十八「禽」引『瑞應圖』吉利・富貴（前田尊經閣文庫所藏）





【圖3】徳興里古墳前室南壁天上畫  
「牽牛之象、織女之象（中央下に猩猩之象）」（小學館一九九八）



【圖4】徳興里壁畫古墳前室南壁天上畫  
「吉利之象（左上）・富貴之象（右下）」（小學館一九九八）  
※左下に見えるのが「織女之象」と天の川



【圖 5】德興里壁畫古墳前室東壁天上畫「陽光之象」（小學館一九九八）

【圖 6】「獐（ノロジカ）」

【圖 7】中國湖北省博物館藏・鎮墓獸

（東京國立博物館編『特別展 中國 王朝の至寶』）



【圖 8（右が寫真圖版・左が書き起こし圖〔下野玲子氏の協力を得た〕）

解放前洛陽東北鄉解坡村南尖冢內出土、飛仙石棺蓋畫像中・牛の頭足（下）・  
獐の頭足の瑞鳥圖（上）（『洛陽北魏世俗石刻線畫集』人民美術出版社一九八七）



【圖9】德興里古墳前室西壁天上畫「千秋之象（右上）、萬歲之象（右下）」  
（朝鮮畫報社『高句麗古墳壁畫』一九八五）



【圖10】『山海經』の人面鳥「鳧溪」  
（馬昌儀編『全像山海經圖比較』二〇〇七引、明・胡文換圖本）